

平成23年2月3日発売の週刊誌の

記事に対する見解について

平成23年2月3日発売の週刊A誌において、国立がん研究センターの平成23年1月24日に示した「イレッサの和解勧告案に対する国立がん研究センターの見解」(<http://www.ncc.go.jp/jp/information/pdf/20110124.pdf>) についての記事の内容に対する見解を述べる。

まず、イレッサの副作用で亡くなった患者の方々に、心より哀悼の意を表します。

- ① 記事には、「これらの声明が横並びに発表されたのは、厚労省の働きかけがあったからだ。」と記載があるが、国立がん研究センターに関しては、そのような働きかけは一切ない。
- ② 記事の内容を見ると、すべてのがん患者の方々からの視点がないため、記事全体が医療側、国、患者、製品会社等の対立を増大させるものとなっている。本来は、全ての英知を集め、対立軸ではない、本当に患者の方々のためになる議論をすべきではないかと考える。

この記載は、昨年4月に独立行政法人化し新たに生まれ変わった国立がん研究センターが重きを置いている「自立・自律・自浄」の精神に反するものであり、がん患者を含めた国民の方々、及び、「All Activities for Cancer Patients (職員の全ての活動はがん患者のために!）」という標語のもとで努力している国立がん研究センターの職員へ誤解を生むと考え見解を記すこととした。

なお、今回の見解において雑誌名を「A 誌」と匿名化したことは、本見解が、逆に当該雑誌を宣伝してしまう可能性を考慮した。

また、国立がん研究センターは、患者の方々と向き合い、できるだけ多くの時間を建設的な話し合いに費やしていきたいと考えている。今後は、このような記事のすべてに見解を示すものではないことを申し添える。

平成23年2月3日

国立がん研究センター理事長 嘉山 孝正